

授業と授業をつなぐ家庭学習で主体的に学び続ける意欲を育む

新潟県 妙高市立妙高高原南小学校

学習に向かう姿勢はおおむね身に付いており、家庭学習習慣の定着も出来ているという妙高市立妙高高原南小学校。課題は、自ら課題を見付けようとする「意欲」が足りないことだった。子どもから主体性を引き出すことを目指し、家庭学習と授業をつなぐ指導に取り組んでいる。

取り組みのねらい

- 自分で課題を見付けて家庭学習に取り組む子どもを育てる
- 自分から工夫して考える力を付ける

取り組みの内容

- 家庭学習の課題設定を工夫することで、家庭学習と授業をつなぐ
- 自分で課題を設定して学ぶ課外の学習活動を設ける
- 家庭学習の状況を記録するノートを活用し、保護者にかかわりを促す

取り組みの成果

- 家庭学習を通して授業への意欲が高まったり、自主的に予習したりするようになった
- 自分が分からない内容に気づき、自ら課題を見付けられるようになった

S c h o o l D a t a

◎1872(明治5)年開校。妙高山をはじめとした豊かな自然環境の中にある、単学級の小規模校。教育目標は、「進んで学ぶ子、思いやりのある子、最後までやりぬく子」。



校長 本間和貴先生

児童数 79人 学級数 6学級

所在地 〒949-2112 新潟県妙高市関川1592

TEL 0255-86-2104

URL <http://azalea.ac.city.myoko.niigata.jp/kogenminami-s/>

公開研究会 未定

● 取り組みのねらい

意欲を持って自分から学ぶ 主体性や積極性を育てたい

妙高市立妙高高原南小学校は妙高山のふもとにある学校だ。昔からスキーが盛んな地域で、冬季の体育の授業では保護者がボランティアでスキーの指導をするなど、スキーを中心に学校・家庭・地域が1つにまとまっている。熱心にスキーに取り組むため、身体能力が高い子どもが多く、また、学力調査の結果から学力の高さも明らかになっている。本間和貴校長は子どもの様子を次のように語る。「塾には通わず、学校の授業と家庭学習が

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

学習の全てという子どもがほとんどで、すべきことはしっかりとやる素直な気質が学力を支えています。授業態度はとても良く、家庭学習では、低学年は30分以上、中学年は45分以上、高学年は60分以上という目標を、ほとんどの子どもが達成しています」

与えられた学習に意欲的に取り組む態度とは対照的に、自分から課題を見付けたり、工夫して考えたりする学習には消極的であることが課題だ。そのため、「自分から意欲を持って学ぶ子どもに育ってほしい」という願いを持って、校内研究に取り組んできた。

● 取り組みの内容

子どもの毎日の家庭学習状況を保護者と教師が確認する

家庭学習習慣の定着については、保護者の支援が不可欠と考え、子どもが家庭学習の状況を書き、それを保護者が確認する取り組みを長年続けてきた。以前は学校独自の書式を用いていたが、2012年度からは、中学年以上は妙高市教育委員会が市内全校に配布する「私の家庭学習ノート」を活用し、家庭学習計画、メディア視聴時間、日記などを記入している(写真)。研究主任で6学年担任の横田信子先生はこう説明する。

「子ども全員分をチェックするのは大変ですが、子どもの日記や保護者のコメントを通して、一人ひとりが家庭でどのように過ごして

何を感じているかがよく分かります。それらを生掛けや指導に生かしています」

長年の指導により、家庭学習の習慣化という目標はおおむね達成した。しかし、「自ら学ぶ内容を見付けられるような主体性までは育めていない」という、次の課題が見えてきた。

次の授業に結び付く課題を出し家庭学習の意欲を高める

そこで、11年度から、家庭学習と授業をつなぐことで子どもの自主性を引き出す指導の研究を始めた。主題は「子どもの学びをつなぐ家庭学習」の在り方を意識した授業改善」として、算数を中心教科に据えた。

「授業の内容を自分で復習したり発展させたりして、『これを使って学ぶ』という意欲

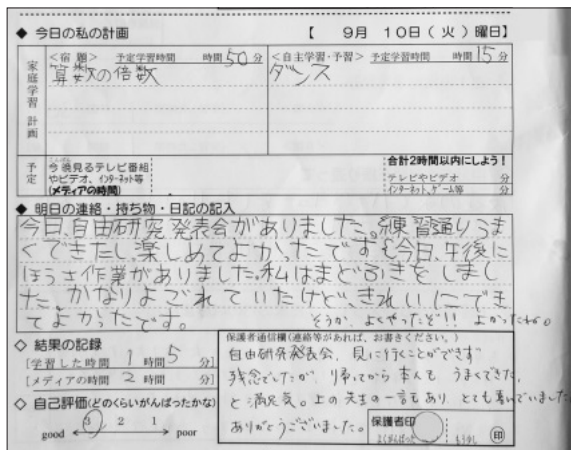


写真 「私の家庭学習ノート」は、子どもが主体的に毎日の家庭学習と向き合うことを目的としている。教師や保護者もコメントなどでそれを支える

妙高市立妙高高原南小学校校長
本間和貴 ほんま・かずたか
「子どもにも居場所や活動の場があり、『面白い！楽しい！休みたい！』と感じられる学校をつくりたい」

妙高市立妙高高原南小学校
横田信子 よした・のぶこ
研究主任。6学年担任。「二人ひとりが確かな学力を身に付け、次のステップへ自信を持って進めるようにしたい」

妙高市立妙高高原南小学校
長澤虎幸 ながさわ・とらゆき
生活指導主任。5学年担任。「ゴールに向かって、今、出来ることに取り組み、互いの成長を喜び合える日々になりたい」

を持つて次の授業に臨み、再び家庭で学びを深めるといように、常に学び続ける子どもを育てたいと考えています。授業で学んだことを生かせるよう、家庭学習の課題を工夫し、その家庭学習を生かした授業をつくるという視点で授業改善を図りました(横田先生)
試行錯誤の末、授業と関連付けるための家庭学習の課題を次の4つに整理した。

- ① **ヒントになるもの** Ⅱ **学習に使う既習事項** などの準備 例えば、6年生の「円の面積」の学習では、学習に必要な平行四辺形の面積の求め方を復習する課題を出した。
- ② **個人差に対応するもの** Ⅱ **駅伝の繰り上げスタートに相当** 個人差を埋めるような課題を出し、次の授業で全員が同じスタートラインに立てるようにする。例えば、1年生は数を

数える時間や精度に差があるため、授業で使うプリントを渡し、そこにある物を数える課題を出して、数えるのが速い子どもも、遅い子どもも自分のペースで準備できるようにした。授業では答えを比べることから始めた。

③ **つまづきが予想されるもの** 3年生の「小数の加法・減法」の学習では、小数点の位置をそろえて計算する場面での誤答が多くなると予想した。そこで、整数と小数の加法を比較し、相違点をまとめるという課題に取り組ませた。その日のうちに復習することにより、「位をそろえて計算する」という意識化が図られ、次時の減法の学習にスムーズにつながった。

④ **活用できるもの** 学習した事項の有用感の体感 6年生の「比」の学習では、理解を深めるために、家庭で比を使っているものを探すとという課題を出した。「麵つゆ」「お父さんが飲むウイスキーの水割り」など、さまざまな答えが持ち寄せられた。

こうした家庭学習を毎時間設定するのは、学習内容や教師の負担の面で難しいが、学期に1度は必ず単元を設定して取り組んだ。その単元の指導計画には、各時間の間に「家庭学習」の欄を設け、課題を記入した(図)。

**保護者が協力しやすい内容にし
授業の様子も伝える**

家庭学習の内容は、保護者にかかわっても

3年生算数の指導計画(抜粋)

時間	ねらい	学習活動	評価基準	評価方法
1	「分ける」ことと「同じ数ずつ分ける」ことの意味の違いが分かり、操作を通して、等分した時の1人分の数を求める。	<ul style="list-style-type: none"> 分ける場面には、2種類の場面があることに気付く。 除法の式の表し方を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 除法の式の表し方を理解している。(知識理解) 	<ul style="list-style-type: none"> ノート
1わり算(ア)				
2	等分除の答えを乗法九九を用いて求める。	<ul style="list-style-type: none"> 具体物や図を用いて、15÷3の簡単な答えの求め方を考える。 乗法九九で除法の答えを見つける。 	<ul style="list-style-type: none"> 具体物や図、既習乗法を用いて、除法の答えを見つけている。(考え方) 	<ul style="list-style-type: none"> ノート 机間巡視
3	等分除の問題を作る。	<ul style="list-style-type: none"> 等分除の問題を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 除法の式を用いると、場面を簡潔に表せるというよさに気づき、進んで問題を作ろうとしている。(関心意欲) 	<ul style="list-style-type: none"> 机間巡視 スタンプシート
家庭学習				
復習：わり算の本(等分除の問題)を作る。				

授業と授業の間に家庭学習の課題を入れて、指導計画を立てている*同校の資料から抜粋して編集部で作成

らうことを重視し、授業で習った内容を説明するなど、保護者の負担にならずに協力しやすい課題を中心としている。これにより、保護者に子どもが学校で何を習っているのかも伝えられる。例えば、1年生で繰り返りがあるたし算の方法を説明する課題を出したところ、自分の言葉で説明することで理解が格段に深まり、保護者にも好評だったという。

こうした取り組みを続けるうちに、子ども

の授業への意欲も高まっていった。「家でこんな勉強をしてきた」「今日はこれをやるんだよね」といった声が子どもから聞かれるようになったと、生活指導主任で5学年担任の長澤虎幸先生は話す。

「家庭で学んだことを授業で生かせるため、『授業で早く話したい』という気持ちが強まるといふ変化が見られました。以前に比べ、全体的に自信を持って、意欲的に授業に臨むようになっています」

「家庭学習をすると授業がよく分かる」「分かっていると授業で活躍できる」という経験を繰り返すことで、家庭学習への意欲が高まり、自ら予習をする子どももいるという。教師の意識も大きく変化した。

「授業と授業をつなぐ課題は、次時以降の展開を踏まえて設定する必要があります。単元全体を見通して指導計画を作成するようになり、単元を通して付けたい力も明確に意識するようになりました」(横田先生)

**放課後の「チャレンジタイム」で
自分の課題を見付けて学ぶ**

自ら課題を見付ける力を育むことを目的とした、課外の学習活動にも注目したい。

同校は、以前から、昼休みや放課後に学習の理解度に応じてドリル学習や発展学習に取り組む「学びの広場」を設けている。この学習活動は保護者と子どもが相談して希望日に

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

参加する形式だが、学年が上がるにつれて忙しさを理由に消極的な子どもが増えることが課題だった。そのため、12年度は学びの広場を継続しつつ、隔週火曜日の放課後の30分間、4年生以上が全員参加する「チャレンジタイム」をスタートした。国語、算数、理科、社会の4教科が対象で、それぞれAコース（基礎）とBコース（発展）を用意し、教科やコースは子どもが選ぶ。興味深いのは、学習内容も子ども自身に決めさせることだ。

「子どもは家庭学習に意欲的にはなりませんが、何をすればよいか分からず、とりあえずドリル学習をする状況でした。そこで、チャレンジタイムでは、自分の課題を見付けることに重点を置きました」（横田先生）

チャレンジタイムでは、授業の復習をしたり、苦手な分野に取り組んだりする子どもが多い。なかなか課題を見つけれない子どもには、テストで間違えたところや苦手なところを学習するように教師が声を掛け、子どもが自分自身の課題と向き合えるようにした。課題を克服する経験を重ねることで、子どもは何を学習すべきかを次第につかんでいったという。指導には、級外職員や外部指導者も加わり、出来るだけ多くのコースを設けている。学習の始めと終わりに子どもが「振り返りカード」に記入し、担任へ提出することで、指導者と担任との情報共有も図っている。チャレンジタイムは、子どもに好評だ。ア

ンケートには、「もつと時間を増やしてほしい」という、学びへの意欲がうかがえる声が寄せられた。そのため、13年度は教科を精選し、毎週の取り組みにした。

「『自分は何が分からないか』を自覚し、課題を見付けられるようになりました。今では自分のやりたいことを学ぶ面白さを知り、静かに集中して取り組んでいます」（長澤先生）

● 取り組みの成果

子どもの変化を踏まえて 主体性を育むノート指導を展開

12年度までの取り組みを通して、家庭学習の課題を工夫し、授業をつないで学びを深めるための指導が確立されつつある。それに伴い、家庭学習に対する子どもの姿勢も主体的なものへと変化してきた。13年度は、更に子どもの主体性を高めるために、授業中の「ノート作り」に着目して研究を進めている。

「ノートは、自分の考えを表出する場なので、主体性を育てるのに適していると考えています。学びの軌跡がよく分かるノート作りを通して、子どもの気付きを促し、意欲を高めていきたいと考えています」（本間校長）

現在は、子どもとの間で良いノートの共通理解を図っている段階だが、既に家庭学習用のノートで自分なりに工夫する姿が見られるなど成果が表れ始めており、教師は取り組みへの手応えを感じている。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

基礎・基本が身に付いていなければ、十分な活用は期待できません。そのため、毎日の授業を大事にしたいと考えています。子どもが主体的に学習に取り組めるような働き掛けを、授業研究を通して考え、常に授業改善を図っていけるような教師集団を目指しています。

本校は小規模校で教員数が少ないのですが、若手教師が多いため、出来るだけ校外研修に参加できる体制づくりを心掛けています。

校長 本間和貴先生

ミドルリーダーの役割

若手の先生方が研修を通して自信を深められる研究体制にしたいという考えで、全員に発言の機会を設けるワークショップ型研修を実施しています。校長先生をはじめとして、ベテラン、若手が対等に、授業や子どもについて語り合う研修を続けるうちに、皆が思ったことを発言できる関係が出来てきたと思います。

これからも、一人ひとりの先生が主体的に参加できるような研修を模索していきます。

研究主任 横田信子先生